学会英文誌のオープンアクセス化に向けて

～(公社)日本水環境学会の取り組み～

(社) 日本水環境学会　佐藤弘泰

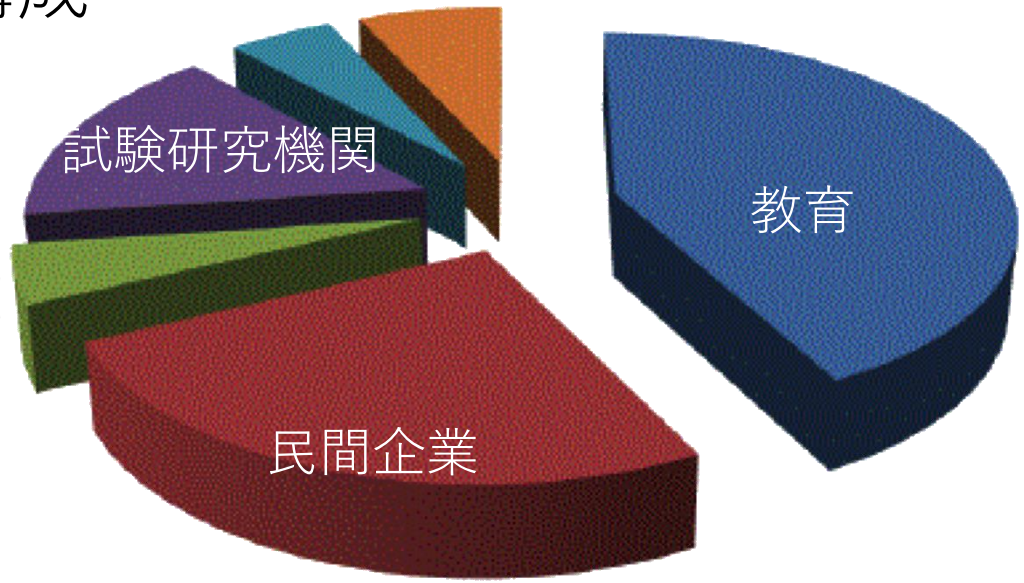
理事
OA化タスクフォース長
元JWET部会長（2010-2018.7）

- 水環境学会の紹介
- JWETの紹介、これまでの経緯
- ジャーナルコンサルティング採択後の時間進行
- 個別の事項（悩んだり検討した事項）

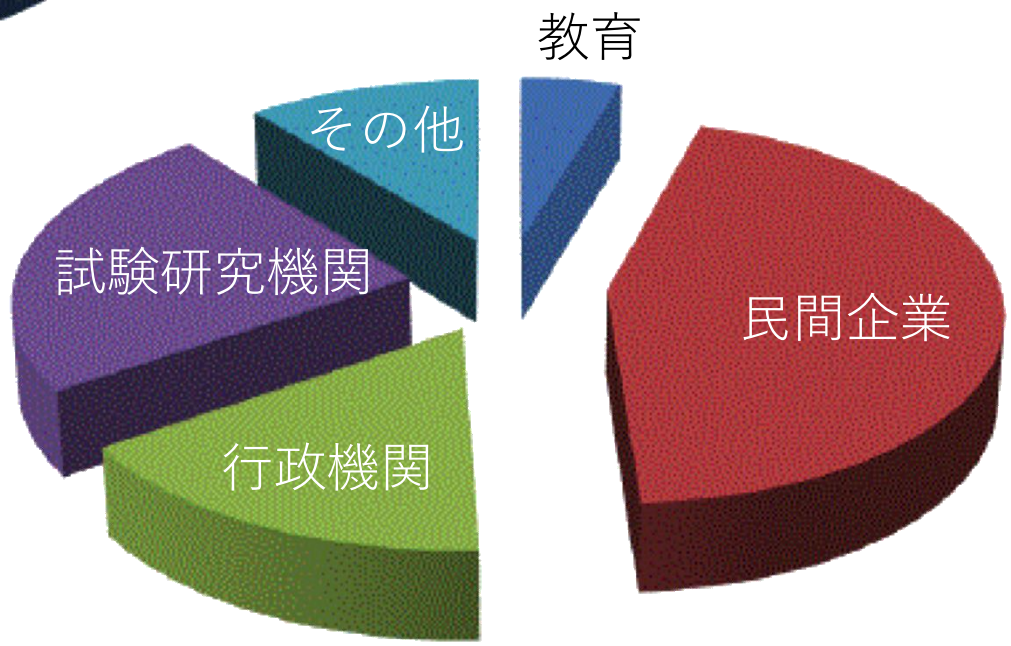
(社)日本水環境学会とは

- 会長：小野 芳朗（京都工芸繊維大学）
- 目的：水環境に関連する分野の学術的調査や研究、
  知識の普及、健全な水環境の保全と創造への寄与、
  学術・文化の発展への貢献
- 歴史：1971 日本水質汚濁研究会として設立
  1991 団体名改称（社）日本水環境学会
  2012 （公社）日本水環境学会
- 会員数：個人会員約2300名
- 関連国際学協会：国際水協会（IWA）
- 主な活動：
  年会、シンポジウム、WET会議
  学術誌発行（水環境学会誌、JWET）
  セミナー、市民セミナー

会員構成



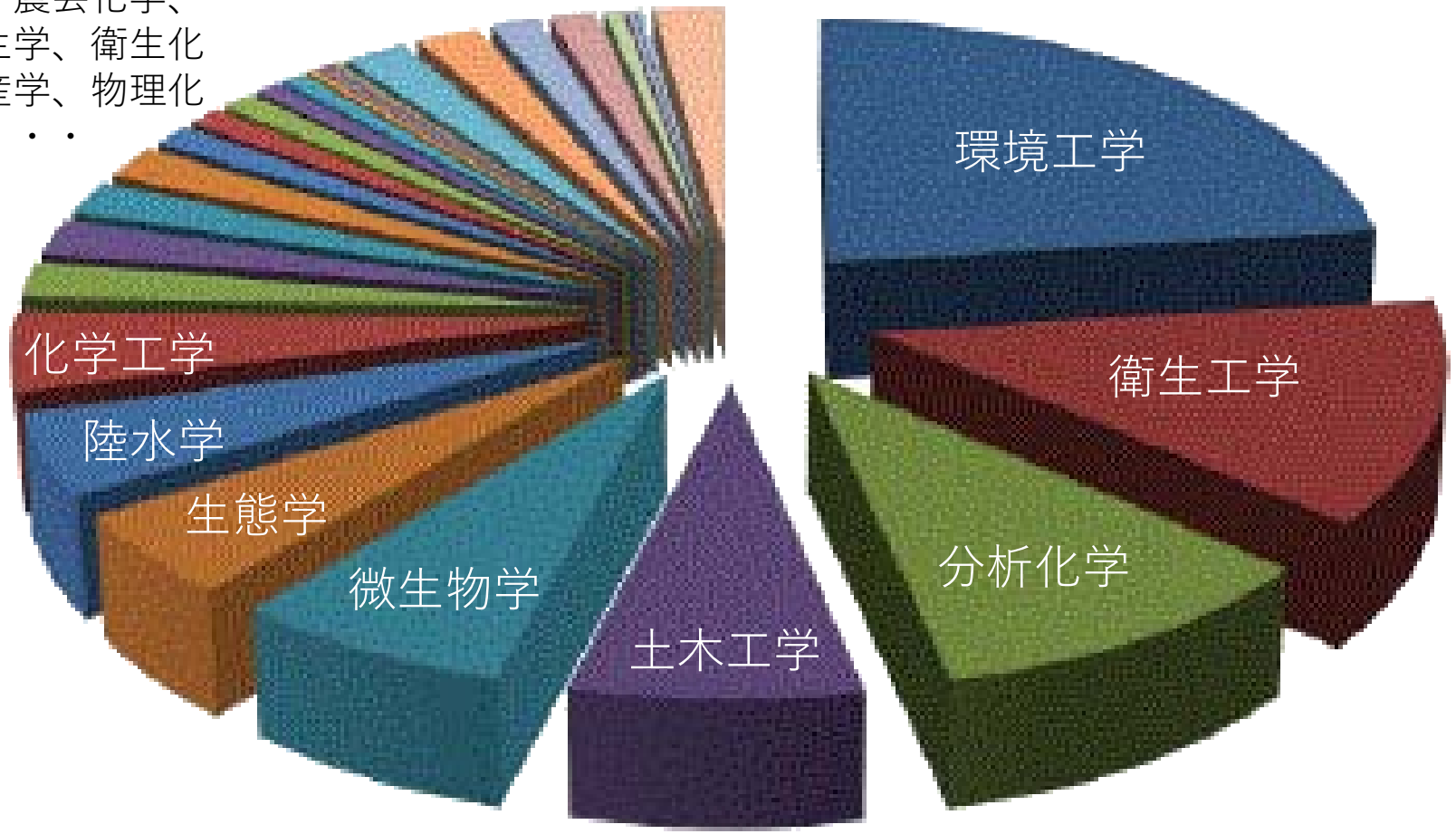
個人会員



団体会員

会員構成

海洋学、農芸化学、公衆衛生学、衛生化学、水産学、物理化学、・・・・



国連SDGs

1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさも守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう

国連SDGs

3 すべての人に
健康と福祉を

6 安全な水とトイレ
を世界中に

11 住み続けられる
まちづくりを

13 気候変動に
具体的な対策を

14 海の豊かさを
守ろう

15 陸の豊かさも
守ろう

学会英文誌 JWET (Journal of Water and Environment Technology)

- 2003発刊：当初は年間1, 2号。
- 2009-2012：年間４号
- 2010-：WET会議（投稿促進）
- 2012-：年間６号（年間30～40本程度の論文登載）
- 2015-：海外研究者をJWET Editorに加えた
- 2018：SCOPUSおよびESCI登録。

- 発刊当初から
  - 投稿料・掲載料無料。
  - J-Stageで、Free Access公開。

(社)日本水環境学会とは

- 特徴
  - 学、官、産、民にまたがる。
  - 学際的。
  - 公害対策→水環境問題→水環境問題の多様化
  - SDGsとも密接に関係。

学会英文誌 JWET (Journal of Water and Environment Technology)

- 投稿が増えて欲しい…
- 最大の解決策はIFを取ること。
  - IFが取れるまで、掲載料をとらないで頑張ろう。
- 2009ごろ始めた取り組み
  - 英文校正による品質向上
  - 研究交流の活発化も兼ね、WET会議を開始(2010-)
- 2015ごろ始めた取り組み
  - 海外研究者をEditorに加えた。
  - Editorial Advisorを招いた。
  - ScopusやESCIへの応募
- 学会財務状況の懸念（会員数減少）

ジャーナルコンサルティング

- 目標
  - まずは、OA化を目指す。
  - OA化をきっかけに徐々にAPCを導入しよう。
  - やがてはインパクトファクターがつけばよい。

ジャーナルコンサルティング　タイムライン (1/2)

- 2018.1～2：J-STAGEアンケート
- 3月：J-STAGEセミナー
- 6月26日：プレキックオフミーティング
- 7月3日：学会にてJSTから事務局長・編集委員長に趣旨説明
- 7月10日：事前アンケートへの回答
- （7月末日：JWET部会長交代）
- 8月13日：JST、InLexioと面談
- 8月末：InLexioからInstructions to Authors案
- 9月、10月：Instructions to Authors案精査

ジャーナルコンサルティング　タイムライン (2/2)

- 10月29日：編集委員会に作業進捗状況報告。
- 11月27日：運営理事会に作業進捗状況報告。
  OA化に向けてOA化タスクフォース設置へ。
- 1月：OA化タスクフォース設置
- 1月28日：編集委員会
  運営理事会に提案する内容をつめた
- 2月8日：運営理事会
- 3月7日：理事会

- さらに、年度明けもう少しかかりそう…

なぜ時間がかかってしまったのか？ (1/3)

- ジャーナルコンサルティングの受け皿を用意するまでに時間がかかった。
  - 最初はほぼ個人として対応していた。
  - ようやく11月末にタスクフォースを組織することになった。

なぜ時間がかかってしまったのか？ (2/3)

- 作業が多岐にわたり、整理するのに手間取った。
  ① OA化のメリット、デメリット
  ② ItAの改訂
  ③ 倫理のよりどころの対外的な表明方法
  ④ 著作権を誰が持つか？（学会？著者？）
  ⑤ CCライセンス、どれにするか？
  ⑥ 著作権規程の改訂、License to Publishの扱いの見通し
  ⑦ APCの設定
  ⑧ APC徴集の方法
  ⑨ 時間進行
  ⑩ 作業の分担と意思決定

なぜ時間がかかってしまったのか？ (3/3)

- JWETの特殊事情
  - 現在一切課金していない。
  - OA化に伴ってAPCを導入するのは、投稿減につながる可能性もある。

- 先にOA化し、APC課金開始はもう少しタイミングを見ようということになった。

個別の事項

① OA化のメリット、デメリット

- メリット：
  - 読者は二次利用しやすくなる。
  - 著者は著作権を有することができる。
  - 学会は著作権を管理する事務量が減る。
  - ただ、メリットは日本の研究者にはあまり明確に意識されていない。
- デメリットはハゲタカジャーナルと誤解されること。
- たまたまIWAの機関誌も2018年度OA化をはじめた。（追い風）

② ItAの改訂

③ 倫理のよりどころの対外的な表明方法

- ・・・

個別の事項

① OA化のメリット、デメリット

② ItAの改訂

③ 倫理のよりどころの対外的な表明方法

- 倫理規程を独自にしっかり作るか、それとも外部にもとめるか
- CSE（Council of Scientific Editors）
- COPE（Committee on Publication Ethics）

④ 著作権を誰が持つか？（学会？著者？）

- 著者に持たせた方が、学会としては著作権関連の事務が減って楽になる。

⑤ CCライセンス、どれにするか？

- ・・・

個別の事項

- ・・・

④　著作権を誰が持つか？（学会？著者？）

⑤ CCライセンス、どれにするか？

- SAは、二次利用の幅がかなり限られ、採用しにくい。
  → CC BY、CC BY-NC、CC BY-ND、CC BY-NC-NDが残る。
- ND（改変不可）を望む著者にはCC BY-NDではなくてCC BY-NC-NDを選んでもらえば良い。
  → CC BY、CC BY-NC、CC BY-NC-NDが残る。
- NC（商用利用不可）を望む著者には、CC BY-NCとCC BY-NC-NDの選択肢を用意した方が良かろう。
  → 結局CC BY、CC BY-NC、CC BY-NC-NDの三択になる？

⑥　著作権規程の改訂、License to Publishの扱いの見通し

- ・・・

個別の事項

- ・・・

⑦　APCの設定

⑧ APC徴集の方法

- オンライン決済サービスで利用可能なもの？
- 消費税は？（国内の著者は当然課税。海外は？）

⑨ 時間進行

- まずはOA化。時間差でAPC導入。
- 原則著者の投稿時のItAが適用されるが、移行期には、古いItAのもとで投稿された論文をOA公開できるようにしたい。
- いつの時点でDOAJに登録申請する？（新しいItAを先行公開する？）

⑩　作業の分担と意思決定

個別の事項

- ・・・

⑨　時間進行

⑩ 作業の分担と意思決定

- 上手にやれば、ある程度は作業分担可能。
- 作業が特定の人に集中してしまう場合でも、形式上は特定の人が作業したわけではなく、組織として作業したことにした方がよい。
- 学会内部の意思決定の仕組みをよく知っている人を巻き込むこと。

JSTやInLexio社とのやりとりに関して

- InLexio社
  - ItAの原案作成
  - ItAの内容については、主には倫理面
  - OA化するかどうか、また、APCを導入するかどうかなど、不確定な部分が多く、ただでさえ文書を起こしにくかった。
  - そうした状況で、関連文書の起草や修正の提案をしていただけたのは、大変ありがたかった。
- JST
  - 学会に出向いて説明していただいた。
  - CCライセンスの解釈など細部について情報をいただいた。
  - 定期的に連絡を取り合うことで、励みになった。

（どうもありがとうございました。）

ご静聴どうもありがとう
ございました。